

元川房三先生と私

法学部教授 宮 川 茂 夫

元川房三先生がご在職三十年余の法学を退職されて二ヶ月が経過した。もともと、本年度も非常勤講師として、「政治学」を始め、いくつかの講義担当をお願いしているのですが、ご退職になったという実感は余りないが、法学部教授会では、いつも私の座席の隣に坐っておられたから、その限りでは一抹の淋しさを隠せない。法学部教員として、本学で最も長くおつきあいを戴いてきた私に、何か一言という「南山法学」編集者のご依頼で、思いつくままに筆をとることにしたが、本学に法学部が設置された昭和五十二年度までは、先生は文学部教授であったし、私は経済学部教授として、公的な場でおつきあいが少なかったことは事実である。したがって、想いは遙か以前にさかのぼることとなる。

先生は大正二年のお生まれで、昭和十二年三月、立命館大学法経学部法律学科をご卒業、その後同大学法経学部助手、講師、助教授として、政治学、特に国際政治学分野の研究に携わってこられたのであるが、戦後は暫らく教職離脱を余儀なくされ、大岩誠先生（南山大学教授、昭和三十二年一月逝去）の知遇を得て、昭和二十七年四月、本学非常勤講師、同年九月、社会科学部助教授としてご着任。以後、本学での研究・教育に携わること生活が始まったわけである。私は昭和三十年四月、本学社会科学部講師として、それまで在籍していた大阪市立大学法学部から移籍したのであるが、南山大学への就任は、元川先生の熱心なお勧めとお力添えの結果であった。たしか昭和二十九年秋の日本私法学会の総会でお目にかかったのが最初だったと思うが、態々学会にお見えになり、南山の社会科学部設置の意義

と将来への抱負を熱っぽくお話し戴いたことをはっきりと記憶している。

当時、社会科学部は経済コース、社会コース、法政コースの三コースに分れており、先生は大岩教授とともに、法政コース担当の少壮助教授として学部基礎のために尽力されていた。法政コースには、講義科目としては今日の法学部に匹敵する内容の科目が用意されていたが、法律部門の専任教員は皆無で、商法は京都大学の大隅健一郎先生が非常勤で毎週京都から出向されるといった案配であった。また憲法・行政法には原龍之助先生、行政学には吉富重雄先生、更に法思想史で阿南成一現本学教授が集中講義で来学されるなど、大阪市立大学とのつながりの深かったことが、元川先生と私をつなぐ上で大きな役割を果たしたことになる。南山大学と私との今日のかかわりあいは、元川先生ぬきでは、あり得なかつたであろう。

ともあれ、私の恩師、實方正雄先生（大阪市立大学名誉教授、元小樽商科大学長）の強いお勧めもあり、何よりも私自身の積極的な意欲の下で、昭和三十年四月から私の南山大学社会科学部での生活が始まったのであるが、研究室は元川先生と同室で、枳中の南山教会聖堂前の現ライネルス館（当時の大学学舎）半地下の一室を与えられた。設備は、現在とは比較にならない程貧弱なものであったが、部屋そのものは腰板も優雅な風格のあるもので、落着いた雰囲気満ちていた。同室ということで読書の合間には研究上のこと、教育上のこと、専任の先生方のこと、家庭のこと、色々話し合った記憶はあるが、内容については定かではない。

社会科学部法政コースは、学部学生実員一学年百三十名中十数名、九十名近くが経済コースだったように思うが、今から考えてみると、法政コースには随分せいたくなカリキュラムが組まれていた。先にも述べたように、法学部なみの講義科目を十数名で聴講するのであるから、経済コース、社会コースに関連する科目は別として、法政コースはローパーの科目など、現在の大学院講義と同様の実態であった。このような中で元川先生と私とのおつきあいが続けられて行つたのであるが、元川先生は当時から学生部関係の役割を兼ねられる等のことがあり、また課外活動のクラブ

でも、部長として学生との接触が多かった。準硬式野球部、山岳部、囲碁部等では、それぞれ二十年、三十年と面倒をみてこられたし、そのことがご退職になるまで、体育会顧問としての先生の顔を作りあげたことができる。更に、先生は何度か学生部長のお仕事を引受けられたが、これらは、先生と学生たちとの緊密な心の交流を示す以外の何ものでもないであろう。社会科学部構想が、なわが国の大学の事態に先んじ過ぎたこともあって、昭和三十六年、経済学部が改組されたとき、先生は文学部に移られ、以後法学部設置まで、十六年の長きにわたって、先生と私とは所属学部を異にしていたのであるが、時として、先生お馴染みの桜山の酒房で談論風発の時間を過ごしたこともあり、また、先生のご専門である国際政治論、自衛戦争像をめぐるご高説を拝聴、ご教示を戴いたことも再々であった。

ご退職を前にした去る日、社会科学部時代の同僚であった伊藤孝一、森茂也、杉山俊治、末重正行各経済学部教授等とともに、おわかれの会を企画したが、二次会には矢張り桜山の酒房があてられた。何十年かの時間間隔がふっと消えて、往時の雰囲気に浸っての楽しい一夜であった。元川先生と私とのつながりは、これからも南山大学における研究・教育を通じて、まだまだ続いて行くに違いない。先生の益々のご健康とご多幸を祈り、今後のご教示とご交誼をお願いして、この想い出の記を閉じたいと思う。

(昭和五十八年五月三十日記)